

2009年9月12日(土曜日)

政治的平等への欲望と デモクラシーの未来

消費志向の文化か、それともシティズンシップの文化か?

小田川大典

R・A・ダール 著
飯田文雄・辻康夫・早川 誠 訳

▶ 政治的平等とは何か

5・29刊 四六判184頁 本体1800円
法政大学出版局

一九五〇年代、六〇年代の北米で行動的な政治分析を牽引してきたロバート・ダールが、『ポリアーキー』(一九七二)以降、政治社会における信念や規範、さらにはそれが織り上げる文化の役割を重視する政治文化論に強い関心を示すようになったことはよく知られている。彼が八〇歳を過ぎて執筆した一般向けの啓蒙書『デモクラシーとは何か』(一九九八、邦訳は岩波書店刊)はそうした関心のひとつの結実であるが、九〇歳を過ぎたダールの手による本書『政治的平等とは何か』(二〇〇六)もまたこの傾斜の延長線上の作品であり、『デモクラシーとは何か』と内容的に重なる部分も少なくないが、政治的平等とデモクラシーの関係についての独自の知見が、カントやロールズの見解との対比において示されている点は注目すべきであろう。

本書でダールが述べていることは、政治的平等はデモクラシーのアルファにしてオメガであるというひとことで尽くすことができる。デモクラシーの出発点は「すべての成人が政治的に平等な存在として扱われる権利を持つ」という政治的平等の「道徳判断」である。言うまでもなく「道徳判断」は事実と緊張関係にあり、その達成には諸々の困難が伴わざるをえない。だが、過去二世紀の間に世界の大部分でデモクラシーが大きく進展したという歴史的事実は、人びとを「不平等という」現状を維持しようとする圧倒的に見える力に抗して「より大きな政治的平等に向けた闘争」へと向かわせる何ものかの存在を示唆している。そしてダールによれば、人びとをそうした「より大きな政治的平等の主張」に駆り立てているのは、「純粋な理性」(カント)や「無知のヴェール」(ロールズ)の背後での推論(ロールズ)ではなく、「エゴイズム、共感、同情、合理性、言語、コミュニケーション」が織り成す「政治文化」における「感情と情念」——政治的平等への欲望——の働きにほかならない(第二、四章)。

だが、デモクラシーの現実において、政治的平等への欲望は「政治的資源、手腕、助機」の配分。時間に関する緩和しがたい制約。政治システム規模。市場経済の普及。民主的とはいえない国際システムの存在。そして深刻な危機の不可避性といった「超えがたい障壁」に直面せざるをえず、実際、今世紀においてデモクラシーの進展が終焉を迎え、各国のデモクラシーが不平等な統治形態の中に埋没してしまう可能性も否定できない。欲望と障壁のどちらが勝るのか。アメリカについていえば、現在のように「消費志向の文化」が支配的であるかぎり、ひとびとは「貪欲な消費者」としての満足の中にまろみつけ、政治的不平等の増加を助長するであろう。だが、資本主義における「消費者志向の喜びに対する過度の強調」は、結果的に、それに対抗する「シティズンシップの文化」——市民としての政治参加によって自らの「生活の質」を向上したいという欲望の集合体——を覚醒させるかもしれない。こうした認識に立脚し、ダールは、六〇年代、七〇年代の対抗的な政治運動——つまりインフォーマルなデモクラシー——を「シティズンシップの文化」の可能性の模索の試みとして高く評価している(第五、七章)。

政治的平等への欲望がデモクラシーを駆り立て、デモクラシーの進展は政治的平等への欲望を深化させる。この相互関係こそが、本書でダールが展開している政治的平等論の要諦といえよう。興味深い議論であり、「理性」ではなく「感情と情念の力」を重視している点は明らかにウォルツァーの熟議デモクラシー批判(『政治と情念』二〇〇四、邦訳は風行社刊)を踏まえているし、政治的平等という抽象的な「理念」に、歴史的事実の中に現れた「欲望」という実質を付与している辺りは、禁欲的な「ウィック・ヴァーチュ」の重要性を唱える現代の共和主義論と比較してみたいところである。また「政治的不平等のない状態」という消極的な意味での政治的平等を求めるひとびとの欲望という事実認識に立脚したダールのデモクラシー論に対し、ルサンチマンの心理学を踏まえたニージェのデモクラシー論者ならばどのような系譜学的批判を展開するだろうかと思像力を逞くしてみたい。頁数は多くないが、読みどころ満載である。

翻訳については、非常に読みやすい訳文ではあるものの、索引にあるように、文脈によって「citizenship」と「civilians」の両方に「市民権」という訳語が付けられている。この点は注意して読む必要があるだろう。

(岡山大学教員)